

伝吉の敵打ち

芥川龍之介

青空文庫

これは孝子伝吉の父の仇あだを打った話である。

伝吉は信州しんしゅう水内郡みのちご笹山村おりささやまの百姓の一人息子ひとりむすこである。伝

吉の父は伝三と云い、「酒を好み、博奕ぼくちを好み、喧嘩けんか口論を好」

んだと云うから、まず一村いっそんの人々にはならずもの扱いをされて

いたらしい。(註一)母は伝吉を産うんだ翌年、病死してしまつた

と云うものもある。あるいはまた情夫じょうふの出来たために出奔して

しまつたと云うものもある。(註二)しかし事實はどちらにしろ、

この話の始まる頃にはいなくなつていたのに違いない。

この話の始まりは伝吉のやつと十二歳になつた(一説によれば

十五歳)天保七年てんぽうの春である。伝吉はある日ふとしたことから、

「越後浪人 服部平四郎」と云えるものの怒を買ひ、あわや斬りも捨てられん」とした。平四郎は当時文蔵と云う、柏原の博徒のもとに用心棒をしていた劍客である。もつともこの「ふとしたこと」には二つ三つ異説のない訣でもない。

まず田代玄甫の書いた「旅硯」の中の文によれば、伝吉は平四郎の鬚ぶしへ風をひっかけたと云うことである。

なおまた伝吉の墓のある笹山村の慈照寺（浄土宗）は「孝子伝吉物語」と云う木版の小冊子を頒っている。この「吉物語」によれば伝吉は何もした訣ではない。ただその釣をしてゐる所へ偶然来かかった平四郎に釣道具を奪われようとしただけである。

最後に小泉孤松こいずみこしやうの書いた「農家義人伝のうかぎじんてん」の中の一編によれば、平四郎は伝吉の牽ひいていた馬に泥田どろたへ蹴落けおとされたと云うことである。(註三)

とにかく平四郎は腹立ちまぎれに伝吉へ斬りかけたのに違いな
い。伝吉は平四郎に追われながら、父のいる山畠やまばたへ逃げのぼつ
た。父の伝三はたった一人山畠の桑の手入れをしていた。が、子
供の危急ききゆうを知ると、芋いもの穴の中へ伝吉を隠した。芋の穴と云う
のは芋を囲かこう一畳敷ばかりの土室つちむろである。伝吉はその穴の中に
俵わらの藁わらをかぶったまま、じつと息をひそめていた。

「平四郎たちまち追い至り、『老爺おやじ、老爺、小僧はどちへ行つたぞ』と尋ねけるに、伝三もとよりしたたかものなりければ、『あ

の道走り行き候』とぞ欺あざむきける。平四郎その方ほうへ追おい行かんとせしが、ふと伝三の舌を吐はきたるを見咎みとがめ、『土百どびやくしよう姓せいめが、大胆だいたんにも□□□□□□□□□□（虫食いのために読み難し）とて伝三を足蹴あしげにかけければ、不敵の伝三腹を据すえ兼ね、あり合あうくわくわ鍬くわをとるより早く、いざさらば土百姓の腕を見せんとぞ息まきける。

「いずれ劣らぬ曲くせもの者ものゆえ、しばく（シの誤か）は必死に打ち合あいけるが、……

「平四郎さすがに手だれなりければ、思うままに伝三を疲らせつつ、打ちかくる鍬を引きはずすよと見る間まに、伝三の肩さきへ一ひ太刀浴とたちびせ、……

「逃げんとするを逃がしもやらす、おが 拝み打ちに打ち放し、……

「伝吉のありかには気づかずありけん、悠々と刀など押し拭い、

いずこともなく立ち去りけり。」（たびすずり 旅 硯）

のうひんけつ

脳貧血を起した伝吉のやつと穴の外へ這は出した時には、も

うただ芽をふいた桑の根がたに伝三の死骸しがいのあるばかりだった。

伝吉は死骸にとりすがったなり、いつまでも一人じつとしていた

が、涙は不思議にも全然まつげ睫毛をうるお沾さなかつた。その代りにある感

情の火のように心を焦こがすのを感じた。それは父を見殺しにした

彼自身に対する怒だった。理が非でも仇あだを返さなければ消えるこ

とを知らない怒だった。

その後のご伝吉の一生はほとんどこの怒のために終始したと云つ

てもよい。伝吉は父を葬ほうむつた後のち、長窪ながくぼにいる叔父おじのもとに下男げなん同様に住みこむことになった。叔父は枅屋善作ますやぜんさく（一説によれば善兵衛ぜんべえ）と云う、才覚さいかくの利きいた旅籠屋はたごやである。（註四）伝吉は下男部屋げなんべに起臥きがしながら仇打ちあだうの工夫くふうを凝こらしつづけた。この仇打の工夫についても、諸説のいずれが正しいかはしばらく疑問に附するほかはない。

（一）「旅硯」、「農家義人伝」等によれば、伝吉は仇の誰であるかを知っていたことになっている。しかし「伝吉物語」によれば、服部平四郎はつとりへいしろうの名を知るまでに「三星霜せいそうを閲けみし」たらしい。なおまた皆みな川がわ鯛庵ちょうあんの書いた「木の葉こは」の中の「伝吉がことも「数年を経たり」と断ことわっている。

(二) 「農家義人伝」、ほんちようこもうちよう「本朝 姑妄聴」(著者不明)等に

よれば、伝吉のけんぼう剣法を学んだ師匠は平井左門ひらいさもんと云う浪人ろうにんであ

る。左門は長窪の子供たちに読書や習字を教えながら、請うもの

にはほくしんむそうりゆう北辰夢想流の剣法も教えていたらしい。けれども「伝吉

物語」「旅硯」「木の葉」等によれば、伝吉は剣法を自得じとくしたの

である。「あるいは立ち木かたきを讐と呼び、あるいは岩を平四郎と名

づけ」、一心にれんま練磨を積んだのである。

すると天保てんぼう十年頃意外にも服部平四郎は突然ゆ往くえをくら晦まし

てしまった。もつともこれは伝吉につけ狙ねらわれていることを知っ

たからではない。ただあらゆる浮浪人のようにどこかへ姿を隠し

てしまったのである。伝吉は勿論らくたん落胆した。一時は「神ほとけ

も讐かたきの上を守らせ給うか」とさえ歎息した。この上仇あだを返そうとすればまず旅に出なければならぬ。しかし当てもない旅に出るのは現在の伝吉には不可能である。伝吉は烈しい絶望の余り、だんだん遊蕩ゆうとうに染まり出した。「農家義人伝」はこの変化を「交まじわりを博徒ばくとに求む、蓋し讐かたきの所在を知らんと欲する也」と説明している。これもまたあるいは一解釈かも知れない。

伝吉はたちまち枡屋ますやを逐おわれ、唐丸とうまるの松まつと称された博徒松まつご

五郎ろうろうの乾児こぶんになった。爾来じらいほとんど二十年ばかりは無頼ぶらいの生活

を送っていたらしい。(註五)「木の葉こ」はこの間あいだに伝吉の枡屋

の娘を誘拐ゆうかいしたり、長窪ながくぼの本陣ほんじん何某ゆすりへ強請ゆすりに行ったりした

ことを伝えている。これも他の諸書に載せてないのを見れば、軽け

いけい しんぎ
 々に真偽を決することは出来ない。現に「農家義人伝」は「伝
 吉、一 郷いつきようの悪あくしよう 少せうと共に屢横逆しばしばうげきを行えりと云う。妄誕もうたん
 弁ずるに足らざる也。伝吉は父讐ふしゆうを復せんとするの孝子、豈あに
 這般しやはんの無状ぶじようあらんや」と「木の葉」の記事を否定している。
 けれども伝吉はこの間も仇打ちの一念は忘れなかつたのであろう。
 比較的伝吉に同情を持たない皆川 蝸庵みながわちようあんさえこう書いている。
 「伝吉は朋輩ほうばいどもには仇あることを云わず、仇あることを知り
 しものには自らも仇の名など知らざるように装よそおいしとなり。深志しんし
 あるものの所作しよさなるべし。」が、歲月は徒いたずらに去り、平四郎の往
 くえは不相あいかわらず変誰の耳にもはいらなかつた。

すると安政あんせい六年の秋、伝吉はふと平四郎の倉井村くらいにいたること

を発見した。もつとも今度は昔のように両刀を手挟んでいたのではない。いつか髪を落した後、倉井村の地藏堂の堂守になっていたのである。伝吉は「冥助のかたじけなさ」を感じた。倉井村と云えば長窪から五里に足りない山村である。その上笹山村に隣り合っているから、小径も知らないのは一つもない。(地凶参照) 伝吉は現在平四郎の浄観と云っているのも確かめた上、安政六年九月七日、菅笠をかぶり、旅合羽を着、相州無銘の長脇差をさし、たった一人仇打ちの途に上った。父の伝三の打たれた年からやつと二十三年目に本懐を遂げようとするのである。

伝吉の倉井村へはいったのは戌の刻を少し過ぎた頃だった。こ

れは邪魔じやまのはいらないためにわざと夜を選んだからである。伝吉は夜寒よさむの田舎道いなかみちを山のかげにある地藏堂へ行つた。窓障子まどしようじの破れから覗のぞいて見ると、櫓ほたあか明りに照された壁の上に大きい影が一つ映うつつていた。しかし影の持主は覗のぞいている角度の関係上、どうしても見ることは出来なかつた。ただその大きい目もくぜん前の影は疑う余地のない坊主頭ぼうずあたまだつた。のみならずしばらく聞き澄ましているても、この佻わびしい堂守どうもりのほかには人のいるけはいは聞えなかつた。伝吉はまず雨落ちあまおの石へそつと菅笠すげがさを仰向けあおもむに載せた。それから静かに旅合羽たびがっぱを脱ぎ、二つに畳たたんだのを笠の中に入れた。笠も合羽もいつの間まにかしつとりと夜露よつゆにしめつていた。すると、——急に便通を感じた。伝吉はやむを得ず藪やぶかげへはいり、

うるし
漆の木の^{した}下へ用を足した。この一条を^{たしろげんぼ}田代玄甫は「胆の^{きも}太きこそ
恐ろしけれ」と^{たた}称え、^{こいずみこしやう}小泉孤松は「伝吉の沈勇、極まれり矣」と嘆じている。

^{みじたく}身仕度を整えた伝吉は^{ながわきぎし}長脇差を引き抜いた後、^{のち}がらりと地蔵
堂の^{かどしようじ}門障子をあげた。^{いろり}囲炉裡の前には坊主が一人、^{らくらく}楽々と足を
投げ出していた。坊主はこちらへ背を見せたまま、「誰じやい
？」とただ声をかけた。伝吉はちよいと^{ひようしぬ}拍子抜けを感じた。第
一にこう云う坊主の態度は^{あだ}仇を持つ人とも思われなかつた。第二
にその後ろ姿は伝吉の心に^{えが}描いていたよりもずっと^{しやうすい}憔悴を極
めていた。伝吉はほとんど一瞬間人違いではないかと云う疑いさ
え抱いた。しかしもう今となってはためらっていられないのは勿

論だつた。

伝吉は後ろ手に障子をしめ、「服部平四郎」と声をかけた。

坊主はそれでも驚きもせず、不審そうに客を振り返つた。が、白刃しらはの光りを見ると、咄嗟とつさに法衣ころもの膝ひざを起した。櫓火ぼたびに照らされた坊主の顔は骨と皮ばかりになつた老人だつた。しかし伝吉はその顔のどこかにはつきりと服部平四郎を感じた。

「誰じやい、おぬしは？」

「伝三せがれの倅この伝吉だ。怨みうらみはおぬしの身に覚えがあるだろう。」

浄観じようかんは大きい目をしたまま、黙然もくねんとただ伝吉を見上げた。

その顔に現れた感情は何とも云われない恐怖きようふだつた。伝吉は刀を構えながら、冷やかにこの恐怖を享樂した。

「さあ、その伝三の仇あだを返しに来たのだ。さつきと立ち上つて勝負をしろ。」

「何、立ち上れじや?」

浄観は見る見る微笑びしょうを浮べた。伝吉はこの微笑の中に何か妙すこに凄すこいものを感じた。

「おぬしは己おれが昔のように立ち上れると思つて居るのか? 己は居いざりじや。腰抜けじや。」

伝吉は思わず一ひとあし足すさつた。いつか彼の構えた刀はぶるぶる切きつさき先を震ふるわしていた。浄観はその容ようす子を見やつたなり、齒の抜けた口をあからさまにもう一度こうつけ加えた。

「立ち居さえ自由にはならぬ体じや。」

「嘘うそをつけ。嘘うそを……」

伝吉は必死ののしに罵りかけた。が、浄観は反対に少しずつ冷静に返り出した。

「何が嘘うそじゃ？ この村のものにも聞いて見るが好よい。己は去年の大患おおわずらいから腰ぬけになつてしもうたのじゃ。じゃが、——」

浄観はちよいと言葉を切ると、まともに伝吉の目の中を見つめた。

「じゃが己おれは卑怯ひきようなことは云わぬ。いかにもおぬしの云う通り、おぬしの父親てておやは己の手にかけた。この腰抜けでも打つと云うなら、立派りっぱに己は打たれてやる。」

伝吉は短い沈黙あいだの間にいろいろの感情の群むらがるのを感じた。嫌け

悪、憐憫、侮蔑、恐怖、——そう云う感情の高低は徒に彼の太刀先を鈍らせる役に立つばかりだった。伝吉は浄観を睨んだぎり、打とうか打つまいかと逡巡していた。

「さあ、打て。」

浄観はほとんど傲然と斜に伝吉へ肩を示した。その拍子にふと伝吉は酒臭い浄観の息を感じた。と同時に昔の怒のむらむらと心に燃え上るのを感じた。それは父を見殺しにした彼自身に対する怒だった。理が非でも仇を打たなければ消えることを知らない怒だった。伝吉は武者震いをするが早いか、いきなり浄観を袈裟がけに斬った。……

伝吉の見事に仇を打った話はたちまち一郷の評判になった。公

儀うぎも勿論この孝子には格別の咎とがめを加えなかつたらしい。もつともあらかじ予め仇打ちの願書がんしょを奉ることを忘れていたから、褒美ほうびの沙汰さただけはなかつたようである。その後の伝吉を語ることは生憎あいにくこの話の主題ではない。が、大体を明かにすれば、伝吉は維新後材木商を営み、失敗に失敗を重ねた揚句あげく、とうとう精神に異状を来した。死んだのは明治十年の秋、行年ぎょうねんはちようど五十三である。(註六)しかしこう云う最期さいごのことなどは全然諸書に伝わっていない。現に「孝子伝吉物語」は下しものように話を結んでいる。

「伝吉はその後家富み榮え、楽しい晩年を送りました。積善せきぜんの家に余慶よけいありとは誠にこの事でありましょう。南無阿弥陀仏。南

無^む阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}。

┌

(大正十二年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伝吉の敵打ち

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>